3 四つの街の物語

以上みてきた瑞穂区の近代の歴史から、何を読み取ることができるでしょうか。これら(①〜⑫)を平野部、台地部、谷間部、丘陵部と4つのゾーンに整理すると、それぞれの特徴が浮かび上がります。

まず、A 西側の平野部では、早々と、運河ができて周辺の土地の整備が進み、その結果、工場の立地が進んだことです。(4〜7ページ ②、④、⑤、⑩)

B 台地部では、なぜか、当時名古屋市外の瑞穂の丘に、五中、八高、高商と、公立の中高等教育の施設が集まったことでしょう。(4〜7ページ ③、⑥、⑪)

C 谷間部では、今日、瑞穂区のイメージを代表する桜並木と瑞穂公園が、耕地整理や土地区画整理の組合の手で造られたことです。(6ページ ⑨)

そして D 東側の丘陵部では、「山林都市」という特別の考え方で街づくりが行われたことだといえます。(6ページ ⑧)

これらはいずれも、当時の都市づくりとして、とても珍しい事例だったと考えられます。では、なぜ、そのような街が形成されることになったのでしょうか。そしてそこにはなにか物語があるのでしょうか。

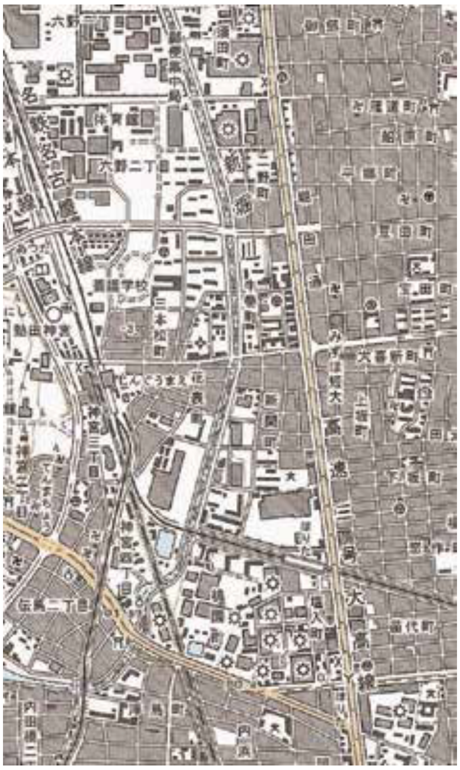
(注)なお、以下の文章はそれぞれ独立して読んでいただけるようにしたため、前の記述と重複するところがあります。

工業団地の先駆け —東京大田区に先行した都市づくり—

古くからの工場の集積

瑞穂区の西側、新堀川に沿って、大きな工場が目につきます。今は住宅や店舗に変わっているところも、元は多くが工場だったと推定できます。またその南側の、国道1号の近くにも、大きな工場が立地しています。そして目を広げると、西側の新堀川の対岸（熱田区）や北側の上流部（昭和区）にも工場が広がっているのがわかります。

これらは、大都市・名古屋の都心から近いところにある工場地域で、他都市にはあまり見られない現象です。この辺りは、まだ名古屋があまり大きくなっていない頃の工場ゾーンだったのです。少し調べてみると、新堀川の改修が竣工したのが明治43年。中心部にある日本碍子は大正8年創立で、大正時代中頃には運河沿いに工場が並び始めたことがわかります。



新堀川沿いの工業地域

このような、整地された敷地への工場の集中は、今日では「工業団地」と呼ばれ、全国に非常に多くの例があります。しかしその歴史を追ってみると、最も古い例とされるのは、東京・大田区の下丸子一帯で、その時期は昭和の初めとされています。ところが、瑞穂区では、先にも述べたように、大正時代には工場が立地しています。このため新堀川の沿岸は、全国でも最も古いクラスの工業団地の可能性があるのです。

では、どうして、新堀川の運河沿いの工場集積が、そんなに古い時代に出来たのでしょうか。

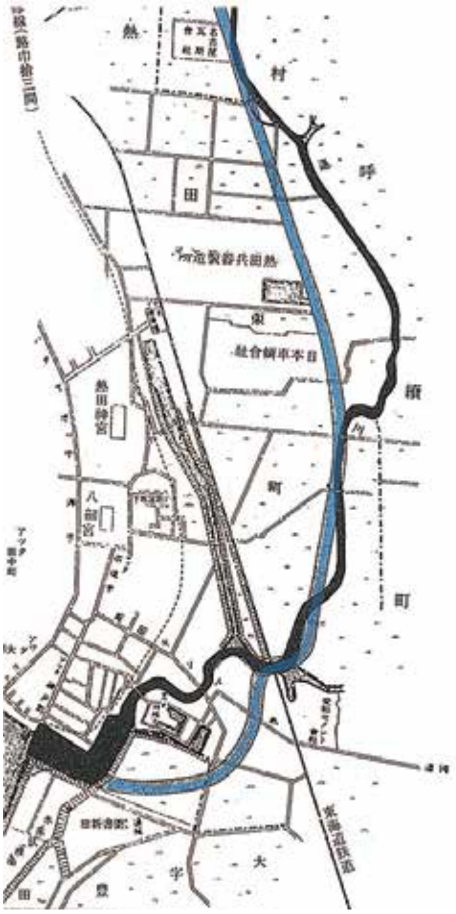
東京大田区下丸子の耕地整理図

「工業団地」とは　Wikipedia より、抜粋

一定の区域の土地を工業用地として整備し、工場や倉庫を計画的に立地させせた地域。日本では東京大田区の下丸子に1934（昭和9）年頃に誕生したものが最初の例といわれている。

1. 精進川の改修 — 運河・新堀川の誕生

明治時代の初め、熱田神宮の東側を流れる精進川は、雨が降るたびに氾濫を繰り返していました。明治16年、名古屋区長の吉田禄在氏は、明治天皇に随行して来名した大隈重信侯に、その改修を進言しましたが、国は動きません。同28年には、名古屋市長が議会にその改修を諮り、議決もされましたが、予算不足に終わりました。



精進川から新堀川へ

ところが明治37年、日露戦争の影響もあって、川の西岸に大きな軍需工場の建設が決まりました。東海道線の熱田駅に近い30㌶です。しかし現地は低湿地だったため大量の埋立土が必要になりました。

それを知った名古屋市は、同38年、その埋立て土に精進川掘削の土を活用することにしました。土の売却によって懸案の改修事業に着工することできたのです。そのうえ土量の計算違いで余った土で、今の鶴舞公園の土地を埋め立てるという付録もつきました。

同43年には、屈曲した川は広いまっすぐな川に生まれ変わりました。

精進川は、江戸時代にも、東の堀川として改修が試みられたことがあるように、高低差が少なく、運河化が可能でした。このため、改修によって、延長6㌔の運河となり、翌44年、「新堀川」と命名されました。

新堀川の記念碑

以上のように、新堀川は元々工場用地をつくるために造られた運河ではありません。西の堀川のような通運利用は求められてはいましたが、基本的には排水のためでした。それが、結果として工場用の運河としても活用されるようになったのです。

2. 耕地整理 — 隣接してできた土地

明治時代の末に、名古屋市の人口は40万人を越えました。産業が活性化し、市外からの流入が続いたのです。ところが、当時の市域は狭く、市街地が不足して、周辺の町村に住宅が不規則に建てられるようになっていました。

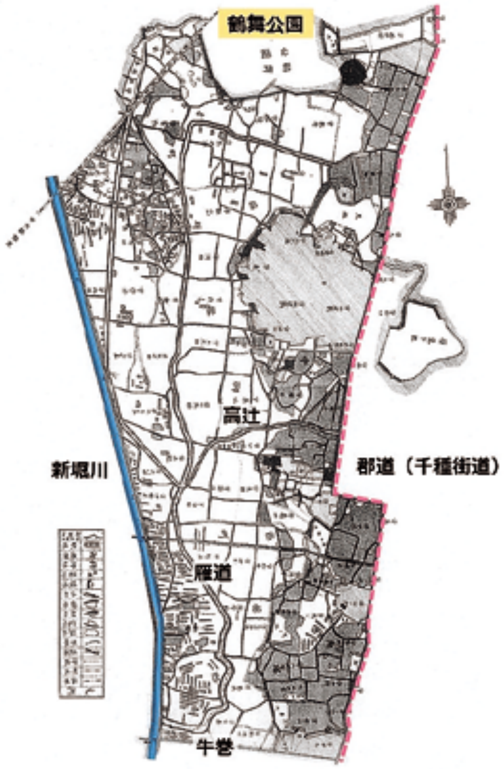
明治41年、愛知郡長になった笹原辰太郎氏は、いずれ愛知郡全体が名古屋の郊外になると読み、早期の市街地整備を訴えていました。当時の愛知郡は、名古屋市の西と東を囲んでいたのです。

そこで氏は、当時、農地を整理するためにあった耕地整理法に目を付け、それで市街地をつくることを考えました。しかし法令違反のため県に否定されたのです。氏は、郡長を辞して野に下り、愛知郡の東部で、大正元年、東郊耕地整理組合を立ち上げました。区域は、南北は鶴舞公園の南から牛巻迄。東西は新堀川から郡道迄。今の区の西北部が入ります。そこを市街地に変えていったのです。

熱田が抜けた愛知郡（明治末）

農地と市街地の違いは、まず道路幅員です。また、区画街路ばかりでなく、幹線道路も必要です。同組合では、東西と南北に8間道路（幅約15ﾒｰﾄﾙ）を計画しました。その道は当初、無駄な道路と批判されましたが、大正12年、早々と市電が走ることになり、先見性が確かめられました。

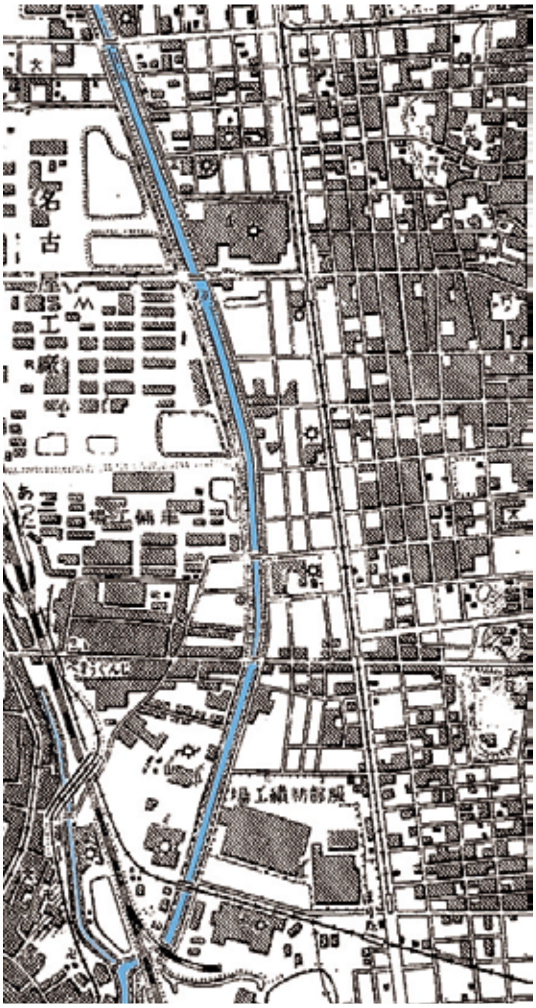
ところが、市街地化で突っ走った笹原氏は、地主の抵抗によって、途中で組合長を交代させられています。しかし整理は続けられ、大正時代の中頃には、瑞穂区の西北部の市街地がまず形成されることになりました。



東郊耕地整理組合の原形図

3. 工場の集積から ― 工業団地の先駆け

大正の中頃、整地された広い土地に目を付けたのは工場でした。この頃は、日本は第一次大戦による好景気でした。工業が大きく伸びた時期で、工場設置の要請が増えていたのです。ところが、大規模な工場用地を確保することは、当時といえども、そう簡単ではありません。



新堀川沿いの工業地域（昭和7年）

そこに、運河沿いの、しかも整備された土地ができました。耕地整理事業中だったため、取得も容易だったのでしょう。新堀川の運河沿い一帯が、工場適地になって、早々と工場群が形成されることになったのです。

これらは、さらに住宅へと波及しました。当時の工場はたくさんの労働力を要したため、外部から人を集め、その従業員の住宅を必要としたのです。このため、その東の瑞穂台地に向けて、従業員の住宅が広がってゆきました。そしてその通りに沿って、東西方向の商店街ができることになりました。

大正時代から残っていた四連長屋

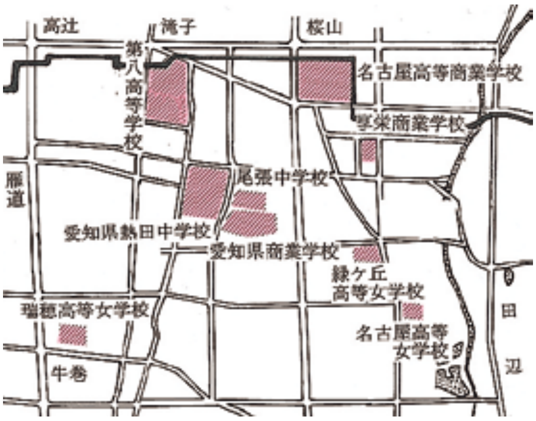
戦後、運河沿いの工業地域は、時代の変化と共に業態が変化したり、規模拡大で移転したものもあり、現在では少し寂しくなりました。

しかしそこに、大正から昭和初にかけて、日本の工業団地の先駆けともいえる開発があったということは、覚えておきたいことではないでしょうか。

高等教育の拠点 —八高・高商 が立地した条件—

大学・高校集中の理由は?

瑞穂区の中央部、瑞穂台地の上には大学や高校が沢山あるのに気が付きます。とくに郡道沿いにある名古屋市立大学(山の畑校舎)や瑞陵高校等。少し東には名古屋女子大やその高校など。さらにその北側には、名古屋市立大学(川澄校舎)や享栄高校など、たくさんの学校が並びます。



昭和13年頃の瑞穂区域の学校

これらの用地は、戦前は少し違った学校用地として使われていました。名市大(山の畑校舎)は旧制の第八高等学校(八高)が、瑞陵高校等の一角は、県立の第五中学校(五中)です。そして名市大(川澄校舎)は名古屋高等商業学校(高商)だったのです。

五　中	→	瑞穂ヶ丘中		
五　中	→	愛知県立女子大	→	高蔵高校
八　高	→	名古屋大(教養部)	→	名古屋市立大(山の畑)
高　商	→	名古屋大(経済学部)	→	名古屋市立大(川澄)

校地の変遷(概要)

明治40年にできた五中は、県のナンバー中学で第5番目の学校です。翌41年の八高は国のナンバースクールで、全国で8番目の高等学校でした。また少し遅れて大正9年の高商は、国の6番目の高等商業学校でした。八高、高商は当地方あげて誘致した全国的な高等教育の学校です。

このようなこの地方トップクラスの中高等教育の学校が、なぜ当時の名古屋市内ではなく、愛知郡であったこの地にでき、また集まったのでしょうか。

高等教育

・高等教育は、中等教育を修了した者が進む教育課程
・現在では、大学(短大、大学院を含む)、高等専門学校 等
・戦前は、(旧制)高等学校、大学(予科、大学院を含む)、(旧制)専門学校 等を指した
・旧制専門学校には、医学、工学、商業、農業 等があった

1. 愛知郡の故に ― めぐってきた偶然

愛知郡というのは古代律令制時代から存在した「郡」で、名古屋地域も入っていました。ところが明治11年の郡区町村編制法では、名古屋は「区」となり、愛知郡は、そこを抜いた、名古屋区を西・南・東と取り囲む一帯が区域とされました。

明治の初め、中等教育施設の整備が始まりました。愛知県立では第一中学校（一中、現:旭丘高）をスタートに、二中（岡崎高）、三中（津島高）、四中（時習館高）と進み、第五中学（五中）は愛知郡（熱田町）の順になりました。ところがその直前の明治40年に愛知郡の中心だった熱田町は名古屋市と合併したのです。このため校地は隣接する愛知郡呼続町の高台、郡道の整備が進んだ現在の名市大（山の畑校舎）の場所に決まりました。

その上位になる高等学校（官立）は国の設置でした。この地方は、第六高等学校の頃からの長い誘致運動があります。しかし実らず、第八高等学校（八高、現:名古屋大学）になってようやく設置が決まりました。校地は名古屋市のはずでした。ところがこの頃、県では、名古屋で開く第10回関西府県連合共進会（博覧会）の開催で大きな予算を使っていました。そこで市部と郡部のバランスから、八高は五中に近い郡部に落ち着いたようです。

そのうえ、文部省の意向で五中用地を八高が使うことになり、開校後1年で五中は南方に引越しを余儀なくされたのです。このようにして、瑞穂の丘の上に五中と八高が並んで立地することになりました。

明治初期の愛知郡（明治32）

名　　称	位　置	現　在
第一中学校	名古屋	旭 丘 高
第二中学校	岡　崎	岡 崎 高
第三中学校	津　島	津 島 高
第四中学校	豊　橋	時習館高
第五中学校	名古屋	瑞 陵 高
第六中学校	一　宮	一 宮 高
第七中学校	半　田	半 田 高
第八中学校	刈　谷	刈 谷 高

旧制の愛知県立中学校（ナンバー中:全）

名　　称	位　置	現　在
第一高等学校	東　京	東 京 大
第二高等学校	仙　台	東 北 大
第三高等学校	京　都	京 都 大
第四高等学校	金　沢	金 沢 大
第五高等学校	熊　本	熊 本 大
第六高等学校	岡　山	岡 山 大
第七高等学校	鹿児島	鹿児島大
第八高等学校	名古屋	名古屋大

旧制の高等学校（ナンバー高:全）

2. 集中する学校 ― 教師の確保?

商業の専門学校(旧制)は、東京と神戸が先行しました。その後、山口、長崎、小樽と続き、いったんストップしました。ところが大正7年、第一次大戦の好景気で、その次の予算が付き、これも誘致運動をした結果、六番目の高等商業学校(高商)は名古屋に決まったのです。

この時の校地選定の経緯はよくわかりません。しかし結果として、八高の東500㍍程の地が選ばれていることを考えると、教授陣の不足を八高の先生を講師に頼るということがあったのかもしれません。事実、高商の教授は当初定員不足で、3人の教授と6人の講師でスタートしています(最盛期定員は教授が25人、助教授8人でした)。

このような先生の交流から、瑞穂区には、もう1つ、高等教育の補助施設が生まれることになりました。高商の英語の教授だった河合逸治氏は、八高でも講師をしており、八高の大学進学の指導に定評がありました。退官後、学生の要請で自宅でも指導をしましたが、入りきれなくなりました。そこで、昭和12年、八高と高商の中間に塾を作り、東大への進学指導をすることになったのです。(東大の入試は英語だけでした。)この塾が、現在の予備校大手の河合塾の原点になりました。

このようにして、瑞穂台地には、国の高等教育施設が集中し、その後、私学の旧制中学校も次々に移転してきました。そのうえ、大学への進学塾までできたのです。

順	名　称	昇　格	現　在
1	東京高等商業学校	東京商科大	一 橋 大
2	神戸高等商業学校	神戸商業大	神戸 大
3	山口高等商業学校		山 口 大
4	長崎高等商業学校		長 崎 大
5	小樽高等商業学校		小樽商大
6	名古屋高等商業学校		名古屋大

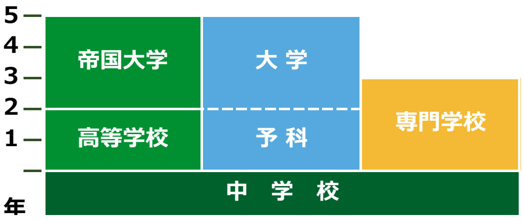
旧制の官立高等商業学校(名古屋まで)

名古屋高等商業学校

八高と高商とその中間にできた河合塾(★印)

3. 高等教育の拠点 — 名古屋大学の母体

戦前の日本の高等教育は、基本的には旧制の、大学（帝大、単科大、私大等）と大学予科（国立の高等学校、私大予科等）、それに専門学校（工業、商業、農業等）でした。大学予科とは、戦後一時あった大学の一般教養を教える教養部にあたります。



旧制の高等教育制度の概要

このうち名古屋は、帝大設置が太平洋戦争の直前になり、それも医学部と理工学部だけでした。したがって、それまでは、大学は官立医科大学（名大医学部）だけで、あとは第八高等学校（八高、現:名大教養部）と専門学校の名古屋高等工業学校（高工、現:名工大）、名古屋高等商業学校（高商、現:名大経済学部）の4校だったのです。

医 学	県立医専	→	名古屋大学医学部
工 学	高等工業	→	名 古 屋 工 業 大 学
予 科	第八高校	→	名古屋大学教養部
商 業	高等商業	→	名古屋大学経済学部

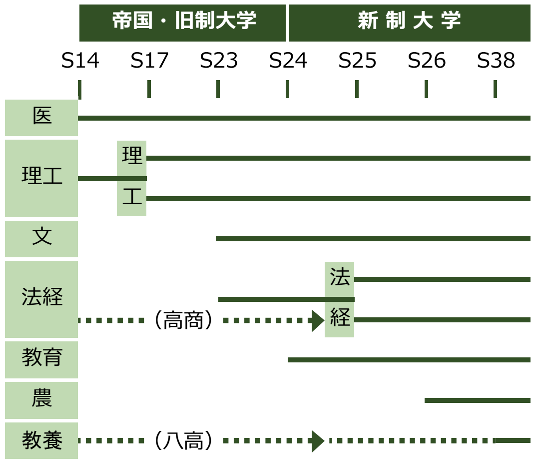
名古屋の戦前の高等教育施設

瑞穂区には、このうち八高と高商の二つがあり、しかも文科系だったため、瑞穂台地は、名古屋の高等教育の拠点として学生の街という雰囲気がありました。

今は少なくなりましたが、滝子や桜山付近には古本屋も多く、学生向けのカフェがあるなど、ハイカラな名古屋の文教の中心地だったのです。

戦後、名古屋大学は、文学、教育学、法学、農学などの新しい学部ができましたが、戦前の母体は、帝大（医学部等）とともに、八高（教養部•一部文学部）、高商（経済学部）でした。

このように瑞穂区は、戦後、名古屋大学が東山キャンパスに統合されるまでの間、その主要部分がある、まさに名古屋の文教の拠点だったのです。



名古屋大学の学部の推移

山崎川沿いの名所 —住民がつくった瑞穂公園と桜並木—

川沿いの名所はナゼ

区の中央東寄りには北から南に山崎川が流れ、周辺は谷地形になっています。この川沿いには区を代表する名所ともいえるところがあります。下流部の瑞穂公園と上流部の桜並木です。

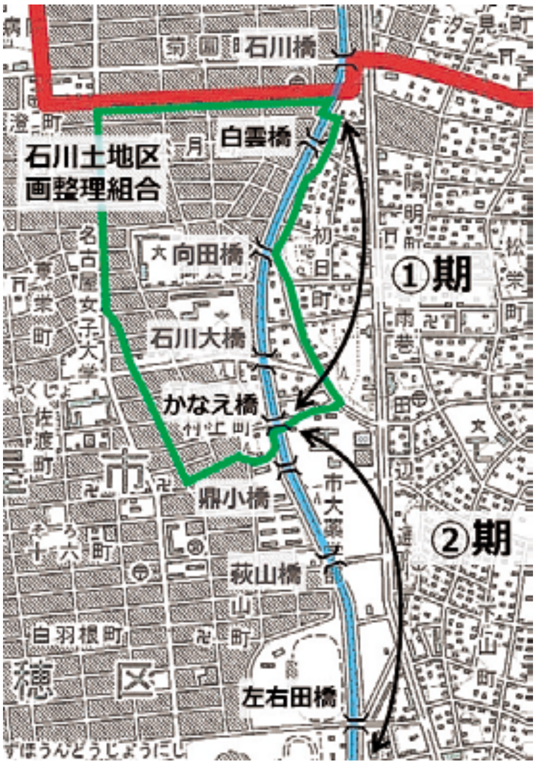
下流部の瑞穂公園は総合運動公園になっていて、陸上競技場のほか、野球場、ラグビー場、その他いろいろな競技施設が揃っています。また上流部の桜並木は2キロメートル以上あり、有名な桜の名所として花の季節には沢山の人出があります。

瑞穂公園は戦前に設置された公園です。戦後の昭和25年に第5回国民体育大会(国体)が開催されました。近年ではサッカーのグランパスの本拠地になっており、2巡目の国体も開かれました。そして今後、アジア大会も予定されるなど、愛知県を代表する、わが国有数の陸上競技場といえます。

一方、山崎川の桜は戦前、石川橋～かなえ橋まで区画整理組合によって植樹されました。戦後、市によって、その南、左右田橋の先まで延長され、その桜並木は「日本さくら名所百選」にも選ばれるような有名な桜の名所になりました。

このように、山崎川に沿って区の二つの名所があります。これらの名所はなぜ、それが、そこにできたのでしょうか。

戦後の瑞穂陸上競技場(マラソン塔)



2期に分かれた山崎川の植樹

場　所	都　市	備　考
岡崎公園	岡　崎	
山崎川 四季の道	名古屋	川沿い
鶴舞公園	名古屋	
五条川河畔	岩　倉 他	川沿い

日本のさくら名所百選(愛知県内)

1. 区画整理組合の競争 — 土地の付加価値

大正10年、名古屋市は大合併で市域はおよそ4倍に膨れ上がりました。瑞穂区の区域もこの時に市域になりました。そして新市域では一斉に市街地整備のための区画整理が始まったのです。昭和の初めころには市内で50を超える耕地・土地区画整理の組合があったといいます。

区画整理事業の事業費は、保留地と呼ばれる土地を売却することによって捻出されます。このためその土地を、高価に早く売却しなければなりません。ところが多くの組合が競合していると、魅力のある土地が先に売れることになります。このため各組合は、土地の付加価値を高めるために一生懸命競争することになりました。

その成功例とされたのが、千種区の田代土地区画整理組合でした。この組合は、当時は交通不便な市東部の奥まった所にありました。その魅力づくりを考えていた時、動物園の移転用地の打診が来たのです。

これに対し組合長と組合が応じ、広大な東山公園等の土地を寄付したのです。同時に組合はそこまで広い幹線道路を通しました。その引き換えでしょうか。昭和12年、動物園開園と同時に市電が走り出し、組合の土地は一気に高騰することになりました。

その動きを横で見ていた瑞穂区の瑞穂耕地整理組合も石川土地区画整理組合も、どんな魅力を付けるか、が大きな課題だったのです。

名古屋市の大合併（大正10年）

田代土地区画整理組合の位置

山崎川沿いの二つの土地整理組合

2. 二つのプロジェクト ― アイディア競争

山崎川の下流側の瑞穂耕地整理組合は、今の瑞穂区の中央部を占める大きな組合でした。一方上流側の石川土地区画整理組合は、区の北側の比較的小さな組合です。そして付加価値をつける土地として選ばれたのが、共に東端の川沿いでした。

瑞穂耕地整理組合は、区域内に田光公園、萩山公園という2つの都市計画公園を持っていました。これを活かしながら何かできないかと考えたのです。出てきたのは、「運動公園」です。昭和の初めは、15年の東京オリンピック誘致が決まったところで、国民の運動熱が高まっていました。

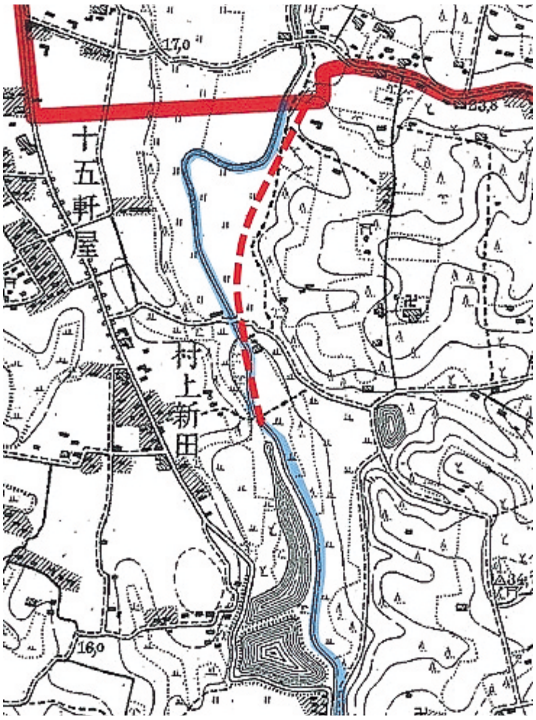
組合は当初、萩山公園を候補にしましたが、市から狭いと指摘されたのです。そこで、位置を東南隅に移し、隣接する弥富、弥富南部両組合と合わせて12ヘクタールの土地としました。これを市に寄付し、運動公園の誘致に成功したのです。

石川土地区画整理組合の区域も、交通不便の地でした。そこで組合は、市電のあった滝子から自力で巡回バスの運行を始めました。また意識して松林を残すなど、景観にも配慮しています。

この組合の大きな仕事は山崎川の流路変更でした。屈曲した川を、まっすぐ通すものです。その流路の完成を機に、両岸に桜を植樹したのです。石川橋から鼎橋の区間になります。その並木は戦後大きくなり、今日の山崎川の桜並木の基になりました。そして戦後、河川改修の終わったその南側にも、第2期として市によって植樹されることになりました。

これらの試みは成功し、瑞穂公園と桜並木は、瑞穂区を代表する名所になっていったのです。

土地を寄付した3つの組合



山崎川流路変更図

石川大橋（昭和9年）

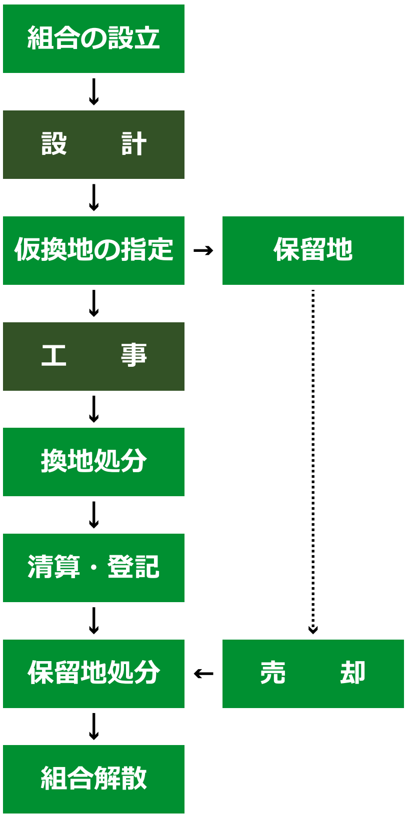
3. 住民がつくった! — 組合事業の意味

実は、以上の話の中で忘れてはならないことがあります。耕地整理や土地区画整理は、一般に組合を作って事業を行いました。その組合は、地主が参加し、役員を決めて事業を実施することになります。

その事業の財源は、前にも述べたように、各組合員（地主）が、少しずつ土地を提供し、それを保留地として売却することによって得られます。いいかえれば、組合で行う事業は、各組合員がその費用を分担していることになるのです。

このため、瑞穂公園は、瑞穂耕地整理組合の他、弥富、弥富南部両組合の組合員（地主）の力でできたものといえます。同様に山崎川の桜並木は、石川土地区画整理組合の組合員の力でできました。まさに、住民参加でできたものなのです。

もちろん時代は変わりましたが、それらが、住んでいる方のご先祖の力でできた名所であることは変わりません。



区画整理事業の流れ

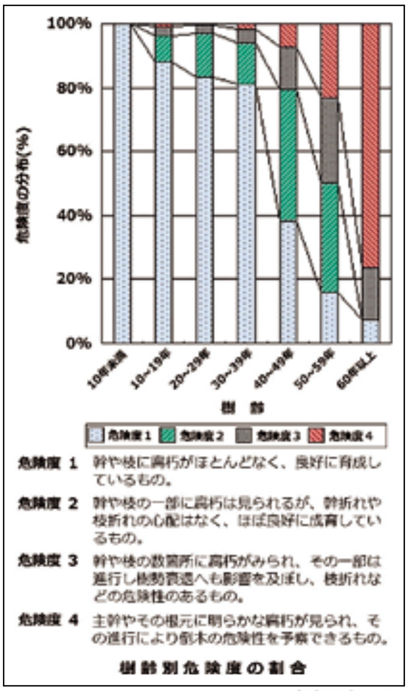
山崎川の桜植樹のおもしろさ

日本の桜は、明治時代以降、それまでのヤマザクラに変わって、ソメイヨシノが推奨された。

ところが、ソメイヨシノは60年位が寿命となる。右の調査では、60年を超えると、9割以上か危険な状態になっていることが分かる。

山崎川の桜は、偶然、30年ほど間を置いて、2期に分かれて植樹された。昭和の初めと、戦後10年程である。

このため、寿命が2期に分かれ、現在は2期目の区間が盛期だが、あと10年ほどすると、再植された1期目の区間が盛期になって、桜並木が継続できることになった。



（財）日本花の会

桜の寿命図

ユニークな山林都市 ―京都・東山の街を夢見て―

特徴ある街並の理由は?

瑞穂区の東部は起伏の多い丘陵地になっています。起伏の多い地形は均されておらず、そのまま、道路や宅地が造られています。

この少し変わった町並みは大正の終りから昭和の初めにかけて、耕地整理や区画整理で開発されたものなのです。

木の少ない八事丘陵地帯(明治)

江戸時代、八事丘陵は風光明媚で有名でした。しかし、明治になって木の伐採が進んでしまい、荒れ果てていたのです。これを嘆いたのが郡長だった笹原辰太郎氏(Aでも登場しました)で、八事保勝会を作って植樹を始めていました。

氏には夢がありました。いずれ名古屋にも「京都の東山のようなところが必要になる」と。その頃、京都南禅寺付近は、疎水による工業地域なるのを免れて、大きな別荘の並ぶ静かな高級住宅地になりつつあったのです。

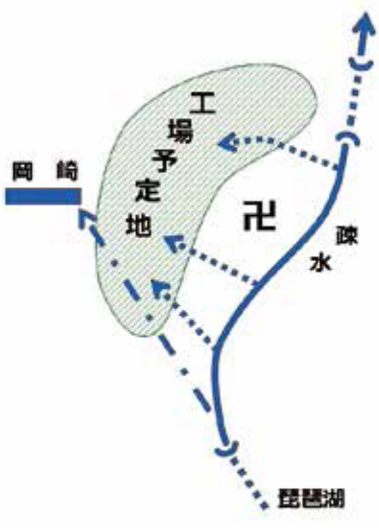
瑞穂区、昭和区、天白区にまたがる八事丘陵は、今日では、自然の地形を生かし、緑の多い丘陵地の街並みとして評価されています。明治時代の荒廃した地域が、このような特徴ある街並みに変わったのは、どうしてなのでしょうか。

京都南禅寺付近の街

琵琶湖疎水の工事が始まった明治の初め、まだ水力発電はなく、水車で動力を得ることが考えられていた。南禅寺付近は工場の予定地だった。

ところが工事が終わるころにアメリカで大規模な水力発電の技術が生まれた。京都はそのトップクラスで水力発電に切り替えた。

現地でなければならない水車と違い、電気は送電が可能で、南禅寺付近は工場用地になるのを免れた。そこで財界が土地を買い占めて、高級住宅地になった。大正の頃である。

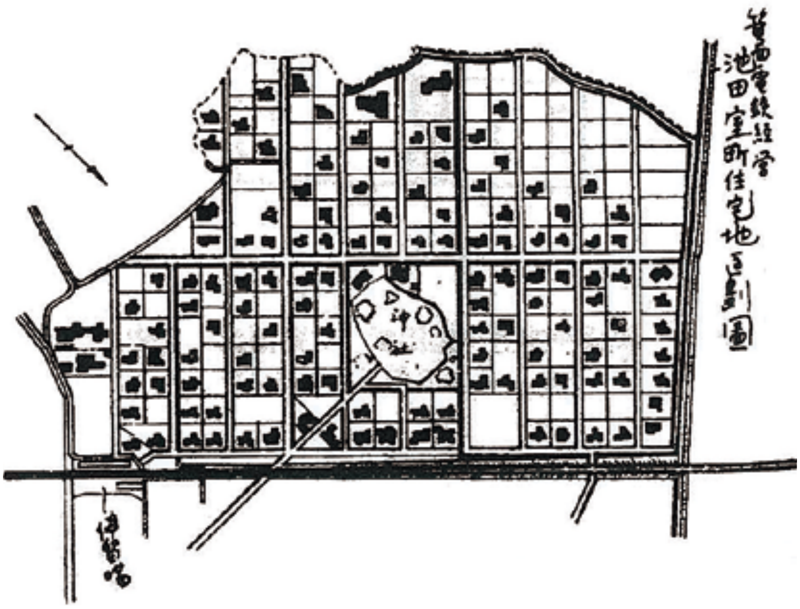


南禅寺付近琵琶湖疎水

1. 郊外都市化 ― 新しい住宅地開発

20世紀になると、大都市の過密化が問題となるようになっていました。日本でも、郊外鉄道の発達によって、郊外に住居を求めようという動きが広がっていました。

関西では阪神や阪急の鉄道沿線です。明治の終わり頃、沿線の御影、甲子園（阪神）や池田室町、岡本（阪急）などで、鉄道会社が開発した分譲地が売り出されました。そして都心から脱出した人たちの居宅や別荘が建設されていきました。



阪急沿線の池田室町の分譲住宅

その頃、イギリスでエベネザー・ハワードが提案した、「田園都市論」が日本にも紹介されました。これは大都市ロンドンで、田園に囲まれた郊外都市をつくろうという主張です。

大正の初めに、東急の渋沢栄一氏がイギリスを視察し、12年、多摩川台で土地分譲を開始しました。これが、今日高級住宅地とされる東京の田園調布になります。

ハワードの田園都市論

○大都市の近郊に
- 都市と農村との長所をもつ
- 雇用の場と自給自足
- すべての土地を共有。非拡大
- 中心都市とのネットワーク
- 想定

  人口32,000人、面積2,400ヘクタール

  市街地400ヘクタール、農地2,000ヘクタール

このように、東西で一気に進んだ郊外都市建設の動きですが、そこにはその特徴を読み取ることができます。一つは鉄道沿線の開発であること。もう一つはディベロッパーが開発する分譲地が中心であったことです。

名古屋でも少し遅れて郊外都市が注目を集めることになりました。しかし東京や大阪とは、やや違った道を歩むことになりました。

東京の田園調布

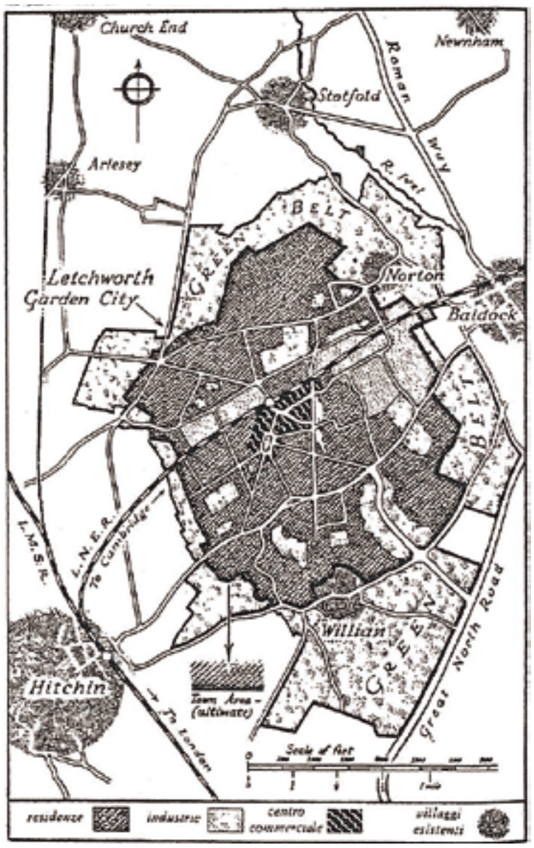
2. 「山林都市」論 ― ユニークな街づくり

大正9年。都市計画法がスタートしました。全国の主要都市では、法の普及のために、都市計画地方委員会がつくられ、国から国家公務員の派遣がありました。

その名古屋の委員会に派遣された幹事に黒谷了太郎氏がいました。氏は英語が専門で、イギリスの田園都市・レッチワースを設計したアンウィン卿と文通し、日本型の田園都市を模索していました。そして、日本は田畑の地価が高いため、安い山林に注目し、日本は山林都市でなければならないと考え、「山林都市論」を発表したのです。

その論文に注目したのが、八事一帯の開発を模索していた(前述の)笹原辰太郎氏と八勝館主人の柴田次郎氏でした。柴田氏は県庁に黒谷氏を訪ね、八事で山林都市を実現してほしいと要請しました。そして、八事一帯での山林都市構想の事業化が動き出したのです。

キーパーソンの黒谷了太郎、笹原辰太郎、柴田次郎の三氏が意気統合し、立ち上がりました。その手法は、東京や大阪とはすこし違う、区画整理が中心です。残念ながら、新法の区画整理が事務的に間に合わず、耕地整理になりましたが、中身は同じでした。それらは、東京・大阪の鉄道沿線の分譲を目指すという手法ではなく、市街地整備に重きを置く、ユニークな街づくりになりました。



イギリスの田園都市レッチワース

八事丘岡地計画の考え方の例

- 地形は均さない:原形のままに
- 道路は曲線主義:心理も視野に
- 緑・風致を保存:区画は大きく
- 地名で演出する:四季を地名に

3. 東部丘陵地開発 ― 思想のある設計

八事一帯の開発構想を示すマスタープランが残っています。「東部丘岡地開発設計図」と名付けられたもので、このプランに基づいて各整理組合の街路が計画されているのです。

東部丘陵地開発のマスタープラン

図を見ると、まず気が付くのは全体の街路が緩やかな曲線で構成されていることです。そして目につくのは、環状の道路です。「輪環道路」と呼ばれ、この地域の計画の目玉になりました。

このほかにも、八事一帯の街区計画には、他に見られない特徴があります。まず、山林都市としてでしょうか。地形は均さず、そのままの地形が生かされていることです。また風致木を保存することも謳われています。さらに土地の区画は大きくして（平均200坪位?）緑を残すように配慮されているのです。

また地名も、季節感や自然を感じるようなものが採用されています。

八事耕地整理組合がつけた町名

この一帯の開発は、トップを切った八事耕地整理組合の設立が大正12年。南山耕地整理組合が同14年と続きました。瑞穂区側では、その後、八事丘陵を、下山、上山、弥富の各区画整理組合へとひろがりました。そして昭和の初めには、区の東北部の丘陵地に市街地が広がってゆきました。

このように、この一帯の市街地は、「山林都市」をシンボルにした、一つの哲学によって企画・建設された極めて珍しい地域であることが分るのです。

以上のストーリーを短くまとめてみると、次のようになります。

A.平野部　工業団地の先駆け ―東京大田区に先行した都市づくり―

瑞穂区の西側の低地には、精進川という川が流れていました。大雨の度に溢れ出し、湖のようになっていたといいます。そのため、明治の初めから何度も改修が試みられてきましたが、資金不足でした。ところが明治37年、西側に大きな軍需工場ができることになり、その基礎の埋め立てに改修の土を売却することで着工でき、運河・新堀川として完成しました。一方、運河沿いは、大正初め、先進的な耕地整理で市街地として整備されたのです。その土地に、大正の中頃、第一次大戦の好景気で工場が次々に立地することになりました。こうしてできた工場の集積は、工業団地として全国で最も早いとされる東京大田区の下丸子地区よりも早く、全国の工業団地の先駆けだったのです。

B.台地部　高等教育の拠点 ―八高・高商が立地した条件―

大正10年まで、瑞穂区の区域は名古屋市ではなく愛知郡でした。明治の末、愛知郡に県立の5番目の中学（第五中学校、現:瑞陵高校）ができることになり、瑞穂ヶ丘の一角が選ばれました。今の名市大山畑校舎の所です。ところが開校1年で、そこは国立の第八高等学校（八高、現:名大教養）に譲られ、五中はその南に移りました。大正9年、今度は国立の名古屋高等商業学校（高商、現:名大経済）が、すぐ東の名市大川澄校舎の所に開校しました。瑞穂区には戦前、名古屋に4つあった高等教育施設のうちの2つが立地したのです。加えて昭和初期に、その2つの中間に高商教授だった河合逸治氏の東大への進学指導塾（河合塾）もできるなど、瑞穂台地は名古屋の高等教育の拠点になっていきました。

C.谷間部　山崎川沿いの名所 ―住民がつくった瑞穂公園と桜並木―

大正10年、名古屋市は周辺町村と合併し、面積が4倍の大都市になりました。そして一斉に市街地整備の区画整理が始まりました。このため各組合は競争で、土地の付加価値を高めるための知恵を絞ったのです。瑞穂耕地整理組合は、山崎川沿いに「運動公園」の誘致を目指しました。ところが一つの組合では面積が不足するので、位置を東南隅に移し、隣接2組合と合わせて市に12haを寄付し、今の瑞穂公園の誘致に成功しました。一方、その北の石川土地区画整理組合では、山崎川の流路を付け替え、新しい川の両岸に桜を植えました。これが今日の山崎川の桜並木になりました。これらの組合事業は、組合員である地主、すなわち住民の負担でできたものなのです。

D.丘陵部　ユニークな山林都市 ―京都・東山の街を夢見て―

明治末、大都市では郊外住宅が注目を集めていました。イギリスの「田園都市」が脚光を浴びた頃です。ところが名古屋にいた黒谷了太郎氏は、日本では田園は地価が高いから「山林都市」であるべきだと論文を発表していました。八事丘陵の荒廃を嘆いていた元郡長の笹原辰太郎氏は、名古屋にもいずれ京都東山のような高級な宅地が必要になると夢を描いていました。そして同志の八勝館主柴田次郎氏と黒谷氏の案に注目したのです。柴田氏は県庁に黒谷氏を訪ね、山林都市を八事にできないかと提案しました。三人は意気統合。大正12年設立の八事耕地整理組合を皮切りに、南山耕地整理、さらに瑞穂区側では、上山、下山、弥富の各区画整理組合が設立され、山林都市による街づくりを進めたのです。「坂は均さず。道は曲線に。緑は残して、区画は大きく…」などという哲学を持つ街づくりは、全国にも例のないユニークなものになりました。